

女性経営者エメラルド倶楽部 代表理事

菅原 智美氏

これで生きる。

新通年企画 特別対談



すがはら・ともみ 1970年新潟市生まれ。リクルートなどを経て、2007年、女性起業家の支援と貸会議室を運営する「NATULUCK」設立。全国で約500人の女性経営者が登録する会員制の「女性経営者エメラルド倶楽部」の代表理事。

長引く不況で、先が見えないこの時代。人々は新しい働き方をどう見つけ、どう生きていけばいいのか。テレビや著書で「仕事」について発言する小山薫堂さんと、女性起業家の支援を続ける菅原智美さんが語り合った。(司会は共同通信編集委員・緒方伸一)

東北芸術工科大教授

小山 薫堂氏



こやま・くんだう 1964年熊本県生まれ。放送作家として「料理の鉄人」「カノッサの屈辱」など。2009年、米アカデミー賞外国語映画賞を受賞した「おくりびと」で脚本を担当。09年から山形市の東北芸術工科大教授。近著に「幸せの仕事術」。

先見えぬ時代 働き方模索

■人との出会い
小山 日本人は「ぶれる」とはいけないと見ているが、今はぶれないと生き残れない。比べてどうか、というのが大半。給料を上げて誰かより低かったら不満だし、逆に安い給料でも皆同じだったら満足する。その原因として、夢や目標を持っていないことが挙げられる。

消費を決めるのは90%が女性だと言われているのに、女性経営者として活躍していない。
子どもがいる女性が働きにくい状況も相変わらず。最近会った33歳の女性は、子どもを産む前は不動産の営業で数千万円も稼いでいたのに、復帰しようとして30社受けて全て落ちてしまったという。

海外進出とシニア
「お二人の働くモットーは。」
小山 「俺たちは幸せだ」という父の言葉が僕のベースにある。父は「戦国時代なら、働くとは人を刀で斬ること。現代に生まれても、水をくむ

「仕事や働くことについて、日本の現状は？」
小山 比較によって仕事している人が多い。「自分の仕事はあのより良い」とか「去年より売り上げが増えた」とか、判断基準が常に外にある。原因は、常に成長を求め社会にある。マイナスを評価する姿勢があれば社会は変わると思う。

バスケットボールのピポットのように、軸足は今の仕事に置いて動かさず、もう片方の足は動かしながら最良のパスを出す判断をすることが求められている。
菅原 女性の起業家を支援している立場から言うと、民間調査会社のデータで女性経営者の割合が日本は6%。米国は25%、アジア各国も40%以上なので極端に少ない。

法はあるか。
菅原 誰と付き合うかで人生は変わる。新しい人と話す、新しい情報も入ってくる。セミナーや勉強会に参加して多くの人と会えば、やりたいことが見つかると思う。
小山 行き詰まっている人は自分のことしか考えていない。打破する方法として、自分のことを差し置いて、他人のことしか考えないで行動し

女性活躍できる社会に 菅原氏

「ぶれる」生き方が必要 小山氏



対談する小山薫堂氏(左)と菅原智美氏

上手に無駄遣いをするかが、日本をもっと元気にするポイントだ。この世代がお金を素直に使えば、日本の文化も向上すると思う。
例えば、神奈川県の大磯で

菅原 企業でも政治、社会でも女性が3割を超えてくると活性化するというデータがある。日本の会社経営者の3割超が女性になるよう、サポートしていきたい。

海外では日本人が経営しているだけでブランドになり得るので、中小企業のビジネスチャンスはいくらでもある。日本の優れた商品やサービスを持って行きたい。
小山 最近、シニア世代のことを僕は「グランド・ジェネレーション」と呼んでいる。このグランジェネがどれたけ

小山 今の学生は、確実にいいゴールが見える所にしか挑戦しない傾向がある。どうなるかわからない物には手を出さない。現代の日本に生まれたことに感謝する気持ちになれば、どこでもいいから働こうという気になるのではないかな。
今後、やりたいことは。小山 大磯のカフェのような店をつなぐチェーンをつくりたい。オーナーが違い、提供するものも違うが、思いだけは同じという「思いのチェイン」店をやりたいと考えている。

ため毎朝2時間歩く国もあるんだぞ」とよく話していた。仕事で失敗しても戦国時代のように殺されないんだから、好きなことをやって人生を楽しまうという思いがある。
菅原 新しいことにチャレンジするのが好きで、起業した。人から感謝され、私と会って人生が変わったと言われるとやる気が湧いてくる。愛する人から感謝され、喜ばれることをビジネスにできれば最高だ。
「これからの働き方、進むべき方向は。」
菅原 日本企業は海外進出していると言われるが、大手企業の工場があるだけで、中小企業はほとんど進出していない。

■ハードル不要
就職難でスタートからつまってしまう。
菅原 待遇が良いとか正社員でなくて駄目とか、ハードルを設けているからではないか。働く人を求めている会社はたくさんあり、ハードルを設けなければ仕事は見つかるはず。何でもいから仕事をし、まず百パーセント本気で働いてみると、いろんなチャンスが生まれてくると思う。

60歳を過ぎた女性が自宅でカフェをやっている。大通りから入った住宅街なので、家族は「誰も来ないよ」と止めたが、売り上げゼロの日がないくらい繁盛している。